「2019年度（第31回）獨協インターナショナル・フォーラム開催報告」

国際環境経済学科・フォーラムコーディネータ　藤山英樹

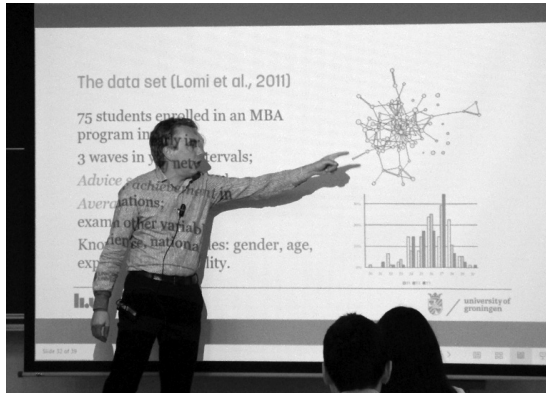
11月16日・17日の両日にわたり、天野貞祐記念館306教室で、第31回獨協インターナショナル・フォーラム「社会ネットワーク分析の新潮流」が開催された。初日は基調講演と各報告、二日目はパネルディスカッションという構成であった。オランダ、米国、オーストラリア、そして国内から研究者を招聘し、近年発展を遂げている統計モデルを用いた分析を中心に、理論から応用を含め多くの議論が展開された。参加者は、東北地方及び関西地方からの来場も含み、おおよそ120名であった。

今回のフォーラムの形式面での特徴は、学術的な性格を強め、慣例となっていた同時通訳を行わず、すべて英語で行った点である。同時通訳を介さないことのメリットは、より臨機応変な報告スタイルと質疑応答が可能になり、フォーラム自体の活性化が図られたことである。他方でデメリットとすると、参加者に対する語学面での障壁が高くなってしまったことである。しかしながら、今後ますますの国際化がすすみ、英語でのコミュニケーションが当たり前となる中で、海外でのフォーラムと同様の体験ができることは、一般の参加者および本学の学生にとっても有益なことと考えられる。実際に、多くの学生も参加しており、教育効果の面でも大きな可能性を見いだせた。

以下、フォーラムの概要を記す。ただし、より詳細な内容は、経済学部からの協力を得て、その紀要である『獨協経済』に英文で掲載されることになっている。というのも、内容がより学術的であり、さらに、『獨協経済』はインターネット上で公開されるので、フォーラムの成果をより広く発信できるからである。

基調講演はステークリヒ氏によってなされた。ここで強調されたことは、ネットワーク分析においてミクロ的なメカニズムがより明らかとなり、マクロ的な現象をより詳細に理解できる、ということである。例えば、お酒好きの友人どうしを考える。これを説明するメカニズムには（a）もともとお酒好きの二人が友人となった、（b）一方がお酒好きでその影響で他方もお酒好きとなった、という2つの可能性が考えられる。もちろん、社会全体としては、どちらかの効果だけが存在するというものではなく、それらは混在していると考えられる。ネットワーク分析を通じて、（a）の効果と（b）の効果の割合が定量的に明らかとなる。

つづいて、ネットワーク分析の応用が報告された。藤本氏の報告では、Young Men's Affiliation Project（YMAP）と呼ばれる藤本氏がコーディネートしている研究プロジェクトの成果が紹介され、医療機関やゲイバーなどの組織間におけるネットワーク分析がHIV感染の予防において、有効であることが論じられた。さらには、医療機関との協力も得ながら、若年のゲイどうしのネットワークデータも得られており、感染予防のための多角的な分析がすすめられている。キム氏の報告は、情報技術（IT）産業の企業に対する分析であり、企業のネットワーク構造と外部のベンチャー企業からの新技術導入との関係が考察された。結果として、より密なネットワーク構造では信頼といった社会関係資本が形成され、外部のベンチャーからの技術導入がより容易となることが示された。これを含み、様々な知見が明らかにされた。ワン氏の報告は、研究者の関係と、所属する機関の関係を同時に考察するというより複雑なネットワーク分析であり、以下のことが明らかにされた。すなわち、より生産的な研究者どうしがネットワークを形成しているが、かならずしも生産的な研究者が大きな研究機関に所属しているわけではない。しかし、生産的な研究者は大きな研究機関を通じて相互のネットワークを築きあげている。最後に、筆者（藤山）の報告では、大学生間における、「勉強についての会話」、「勉強以外での会話」、「アドバイス」という3つのネットワークが同時に分析された。春学期には、「勉強についての会話」が新たな「勉強についての会話」を生み出し、自己増殖的に関係を広



げていくが、秋学期にはそうした傾向がなくなってしまう。その中で、「勉強以外での会話」、「アドバイス」を通じて、「勉強についての会話」を広げていくという有効性が示された。

つづいて、隣接分野からの報告がなされた。佐藤氏の報告では、社会学の視点から、社会関係資本と社会ネットワークとの関係が議論された。すなわち、社会ネットワークと他の要因が、効用関数によって、社会関係資本に変換されるという考え方が示された。これにより、同じ社会関係資本が同時に異なる効果をもたらしてしまうという現象上の混乱を整合的に理解することができる。五十嵐氏の報告では、社会心理学と社会ネットワークとの関係が議論された。社会心理学では、分析の単位

として「個人」に注目する一方で、分析の対象としては「個人の関係」に注目する。実際に1930年代から人々の関係をネットワークで示すSociometryの分析がなされてきた。しかし、当時は分析手法が未発達であったため、分析単位と分析対象の性格の違いからくる困難に直面した。一つの克服として、「個人の社会に対する認識」という分析の視点が提示された。他方で、現在の社会ネットワーク分析の発展によっても、こうした克服をなしえることが議論された。前嶋氏の報告では、ビジネスにおける実践としてどのようにネットワーク分析が用いられているかが示された。日本のビジネス界では名刺交換という文化があり、これを用いてネットワークを作成でき、これをもとにビジネスパーソンのタイプ診断、適切な人材のサジェッションなど、様々なサービスが開発されている。他方で、ビジネスの現場では、予測や意思決定のための情報としての社会ネットワーク分析が求められ、状況の理解・真理の探究という学術的な関心との乖離も存在することが示された。

二日目は、初日の議論で多く用いられたExponential Random Graph ModelとStochastic Actor-oriented Modelの相違を明らかにしつつ、各報告のより深い理解のための議論を行った。そして、経済活動、コミュニティー、教育といった各領域で、ミクロ的なメカニズムとマクロ的な現象の関係を明らかにできる社会ネットワーク分析の有効性が確認された。

各報告・パネルディスカッションともに、聴衆および他の報告者からの質問があり、それをもとにした活発な議論もなされた。例えば、ネットワーク分析について、外れ値(outlier)をどう対処すべきかという質問があった。ネットワーク分析においては、外れ値となるデータが非常に大きな意味をもつことが多い。例えば、スター型のネットワークでは中心の点が外れ値とみなされるが、この点こそが構造的に重要な位置を占める。したがって、外れ値を見つけた場合はその実質的な意味をしっかりと見定めることが重要となる。また、日本経済全体に対するネットワーク分析の有効性はどうかという論点もフロアーからいただき、日本型の企業系列と市場の比較という議論につながった。このように、全体として非常にアクティブなフォーラムとなった。